

# ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部

■発行日 　2008年2月2日

■連絡先 　藤川博樹

〒115-0045 東京都北区赤羽 1-48-3-203

有限会社マイクロデザイン内

Tel 03-5249-5797 Fax 03-3901-6090

■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

## No.312

### 2月行事日程

#### ■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ  
ワード・一太郎文書も可  
kamo@sun.email.ne.jp  
エッセイ：5枚（2000字）  
小説：10枚（4000字）目安

#### ■締め切り

2008年2月20日（水）

#### ■郵送料・年会費

1200円（年）

郵便振替：東京 00170-1-18290

■送料カンパお願いします。



晩秋の色。11月だというのにこの収穫。かつてないことである。上からキハツダケ、右にウズハツ、中央がアカモミタケ、そして下にコウタケ。

### ● カノシタ・コウモリタケ ●

■08正月からの第2回「職人・技の祭展」に向けて、秋は仕事で忙しかった。ほとんど山歩きができず、つらかったが、思いあぐねてふと山にはいると、そこは晩秋の色であふれ、季節の最後の恵みがあちらこちらにやさしげな顔をのぞかせていた。左の写真はカノシタ。いつもふしぎに思うのは、これほどの優秀な食菌を誰も採集しない、ということだ。それこそ思い付きの、衝動的に場に立ち会えばそこには撩乱の華、というわけだが、こういう幸運が毎年、自分にばかり訪れるというのは、じつは界限でこのキノコを食卓に乗せているのが自分だけである、ということを示していないか。カノシタ、理解者の少なさよ。フランス人はこいつに目が無い、という。やつらは味を知っている。グロテスクなアミガサタケもへっちゃらだ。ナマコを食す日本人がカノシタに目を向けないのはがっかりだが、そのおかげでわたし自身は大量の収穫にありつく。ここはただよろこぶべきだろう。



カノシタ



コウモリタケ



◆中井書店数学研究所がTBS TV「エジソンの母」の取材を受け、2/8金曜放送分にクレジットが出るそうです。要注目！

◆「日本児童文学」最新号（1・2月号）に、蒲原ユミ子氏の作品が掲載されました。ふみの会ニュースにのせた「夕日の木」をリライトしたものです。ぜひご一読ください。「飛び出せ、新人」というコーナー名は恥ずかしそう。

# 小説 パンドラの箱



藤川博樹

## 第八章 星野社長の小説と磯野宏至

郷土の研究シリーズもマンガも、そこそこ売れていて、大きなことを考えなければなにかやっつけていけるにもかわらず、社長は「打って出る」ことばかり考えていた。有働さんの出版が頓挫したにもかかわらず、「現代小説叢書」を成功させたかった。その年のオール讀物の新人賞「鉄騎兵、跳んだ」を読んで感動し、常三にも是非読めという。オートバイレースの話でなかなか感動的な快作だった。社長の「芥川賞まで行くんじゃないか」という予想は当たらなかつた。常三にはどっちかという直木賞候補だと思われた。この作品は次の年に映画化された。また、筒井康隆の旧作新作を読みまくって、ドタバタのブラックユーモアにしっかりと感心し、常三にも出版されたばかりの、文壇と文学賞をおちよくった『大いなる助走』や大江健三郎が朝日新聞の文芸時評にとりあげた『宇宙衛

生博覧会』を読ませた。社長もこういうユーモア小説を書きたかったのだ。

社長は、昔の夢を忘れることができず、同人雑誌を創刊した。出版屋なのでノウハウはそろっていた。知り合いに同人誌参加を呼びかけた。いつも高田場ビックボックスの一階で社長のおごりで吟醸酒と一緒に飲んでいる塩野さんも参加した。塩野さんは近くの編集プロダクションでピンクレディの本を企画出版したりしていた有能な編集者だった。知人友人のついで、優秀な同人が集まった。現役のイラストレータや、詩人が参加した。同人の合には来なかつたので常三はついに会わなかつたが、フォークシンガルの友川かずきや三上寛、歌手の来生たかおの姉である詩人の来生えつこが詩や文章を寄稿した。なぜか雑誌の名前は江戸川乱歩などが活躍した推理小説専門誌『新青年』と同じだった。

印刷は、安く済むので府中の刑務所で行われ、常三はゲラ刷り（校正刷り）を府中まで取りにいった。社長は昔大学の卓球部でキャプテン

をやっつけて、卓球向きの体型をしていた。足が短く胸が長く筋肉質で、スマッシュを打つとき腰を構えるだけでなく、上半身を回転させるだけでよかった。居酒屋で飲んでいて塩野さんに「社長、いつ指詰めたんですか？」などとからかわれ、社長は「おっ、おっ」と怒ったふりをして「なんだ、海坊主のくせに」と反撃した。塩野さんはヌーボーとして体が大きく、髪を坊主に刈りあげていて海坊主の尊称にふさわしかった。塩野さんはプロダクションでやとっている若い女性をよく一緒に飲みに来てきた。山下さんというギャルは、「わたし、やせて見えるけど胸が大きくてピキニを着ると似合うのよ」などと自分で言っただけを盛り上げていた。それで、みんなビックボックスのプールに泳ぎに行こうということになった。その方が酒を飲んでいよりよほど健康的だという意見で一致した。約束の日の昼過ぎから、四人が水泳着をもって集まった。ビックボックスのスポーツセンターの受付に行く

と、あらかじめ入会していないと泳げ

ないと断られ、そのままいつものように飲み屋に直行になってしまった。社長は「もつとも健康的なコースのはずが、もつとも不健康なコースになってしまった」と笑った。残念ながら山下さんの胸はみられなかつた。そこで、山下さんはブラウスのボタンを一つはずして、胸の美しさを証明することになった。胸元がわずかに覗いた。社長は「うん、わかつた。だけど、このさいもう一つだけ」ボタンをはずして欲しいという。塩野さんもおもむろに指を一本たてて突き出し「もう、ひとつ」と二人で、交互に「もう一つ」「もう一つ」とボタンを要求した。そんな馬鹿なことを言っているうちに、水泳で体を鍛えるはずが、いつものように酔いが深まっていき、社長も塩野さんもメロメロに泥酔してしまった。

塩野さんは後に芥川賞の候補になり作家になった。居酒屋で社長はいつもへべレケになるまで飲み、翌日は二日酔いで会社に遅れてくるが多かつた。

社長と二人で高田馬場のカード下の飲み屋に入ったこともあった。流して生演奏する年取った男のバイオリン弾きがきて、客の求めに応じて伴奏した。演歌を歌い一曲歌うたびに社長は三千円を払った。常三は「くちなしの

花」を歌ったが、二番の歌詞を知らずうたえなかった。「二番ハ知ラナイツてやつだ」と言つて社長は笑つた。女将から酒の追加を聞かれて社長は「マダムのおっぱいが飲みたい」などと居酒屋の女将をからかっていたが、百戦錬磨の女将の方も自分の乳房を下から支えて「まだ出るわよ」などと平然と受け流している。立教大学に入ったばかりの女将の姪が店を手伝いに来ている、常三の隣に座つてお酌した。若い者同士話はずんで、終わり頃には常三はいつのまにか姪の手を握つて「また来るからね」などと約束していた。

日本酒の熱燗をほとんど社長が飲み、常三もいつのまにか大量に飲み、気づいたときにはカウンターの上面に三〇本近くの徳利が倒されて見事に並んでいた。常三が姪の手をとつて別れを惜しむと、女将がまた一人で来るといよいよと言つた。社長は「おっ、いつの間にか……。おれもマダムに会いに来るからね」などと約束したが、ついにこの店を再び訪れる機会はなかったようだった。翌朝、会社に出勤して、社長と二人で机に寄り掛かつて頭を抱え込んでいると、社長が「あつと気づいたら、テーブルの上にだーっとすごい本数のとつくりが並んでた。いつあんなに飲んだんだ。あれおれたちが飲んだの

か？ 誰か他の客の分の酒をつけられたんじゃないのか」などとぼやき、「俺がこんなにつらいんだから、あんたもつらいだろう」と言つた。

星野社長に命じられて、常三はあつちこつち全国の同人誌を調べ手紙を送つた。何かいい作品がないかと、あらゆる小説同人誌を集めようというのだ。たくさん同人誌が送られてきて、片端から読んだがなかなかいい小説はなかった。たつたひとつだけ常三が感銘を受けた小説があった。女性の主人公が肉体的関係にまでいたつた男に捨てられてから、山に登り失恋の精神的な傷を乗り越えていこうとする。山に行くまでの迷いと嘆き、そして痛手から立ち直り、山に登りながら強い自我を確立していこうとする心の動き、心の動きに呼応して描かれる自然描写が素晴らしく生きていて美しかった。常三は感じたことと、修正した方がいい小さな欠点を指摘したハガキを書いて送つた。すぐに作者から礼状が届き、これから小説を書いていく決意が書かれてあつた。それから半年ほどした正月に、作者の旦那さんという人から賀状が届いた。そこには小説の作者が北アルプス穂高で遭難して亡くなったこと、「小説『夏子の槍ヶ岳』での励ましありがとうございます」と書かれてあつた。

てあつた。

社長は民主文学の小説の添削に応募して批評をおおいだ。わずかな手数料を払うとプロの作家が講評をしてくれるという制度を利用したのである。猫山犬彦というふざけた名前で、ユーモア小説をねらつたものだ。社長は昼間も仕事の合間に原稿用紙に向かい、五時以降も酒も飲まず二週間ほどかかって完成させた。出版社のマンガ担当の編集者が漫画家から締め切り前に原稿をもらうため、夜討ち朝駆けで逃げ回る漫画家の後を追いかけて回し、徹夜で仕事場で張り番をし、なだめすかして、あの手この手で原稿を奪い取るというドタバタ喜劇だった。

しばらくして、小説の講評が送られてきた。A4版の封筒を開封したとたんに社長の悲鳴が聞こえた。「なんだ磯野かよ」講評者は社長の旧知の間人だったのである。講評は「人生的な重い内容より、軽みのあるユーモアをねらつたという作者の狙いはわからないでもないが、その狙いははずれているといわざるをえない」というものである。常三はその小説は読んでいなかったが、『新青年』に掲載された社長の小説は、描写は細かいが深い観察力がなく、ふざけた文章がならんでいるので、磯野宏至の感想は当たっている

ように思われた。社長は、前に出版社に勤めていたときから、組合の関係で他の出版社に勤めている磯野氏とは旧知の間柄で、組合運動では社長が先輩格であつた。磯野氏はすでにいくつもの小説を発表し始めていて、読者もつき、そろそろ短篇集が出てもよさそうに期待され一部での評価も高かつた。どこかの大家ではなく、後輩でやや軽く見下してすらいた磯野氏に酷評されたことで、社長はがっかりしてしまつた。

翌週、会社に電話があり社長が出る、磯野氏だった。民主文学の講評は公平のため作者の実名を伏せて担当者に渡される。あとで作者の実名を聞いた磯野氏があわてて電話をしてきたのだ。磯野宏至はさかんに「面白かつた、本当に面白かつたですよ」と連発した。社長は電話を切つたあと「磯野のやつ電話してきやがつた」と笑つていた。しかし、現代文学叢書に磯野氏の最初の短編小説集を入れるという水面下で進んでいた計画は壊れてしまった。磯野氏の短篇集『水平線の歌』が出版されたのはそれから七年後、みずち書房からである。

## 大峰山(1)



中井 豊

国道一六八号線と一六九号線は、いずれも奈良県南部を南下して走る。前者は奈良県下市町から和歌山県新宮市へ、後者は奈良県五條市から三重県熊野市に至る。両者を東西に隔てるのが大峰山脈である。この山脈の峰から峰を行く修験の道が一本あつて、吉野から熊野本宮へおよそ一〇〇キロと言われている。これを「(大峰)奥駆け道」という。役の行者(小角)が奈良時代

(七一〇〜七八四年)に開いたと伝えらる古道だ。

大阪から近鉄・吉野線に乗って終点の吉野駅で下車すると、そこにケーブルの千本口駅がある。五分で吉野山駅。大峰山もそうだが、吉野山にはこれといったピークはない。あたり一帯を吉野山と言って、古来より桜の名所である。ここからバスで奥千本まで行く。登山はここから始まる。

初めて吉野へ行ったのは確か大学へ入った年だっと思う。高校の同級生・後定友君が建設省に就職し、津風呂湖の事務所に勤務していたので、寮に泊めてもらい桜見物した。彼は読書家で、

高校生の頃はラブレターの「ガルガンチュア物語」などを読んでいた。大学へ進むに相応しい学問への意欲に富んでいたし、学力に全く不足はなかったが、末っ子だったため就職したのである(後に働きながら神戸大学の夜間部を出てノンキャリアのまま文部省に移った)。この折りは、満開の桜は小雨に散っていたが、人出が多くなくて幸いだっただかも知れない。

さて、奥千本から最初に目指すのは青根方峯(八五七m)である。頂上には樹々が繁っていて展望はよくない。次に、四寸岩山(一二三六m)、大天井方岳(一四三九m)と続くが、その中に二蔵小屋がある。この小屋は中に囲炉裏と毛布がある上、新しく建て直されたものだから、とても綺麗である。二度ほど休憩しただけなので、食糧・燃料と酒を持参してそのうち泊まってみたいと思っている。

四寸岩山からの稜線は一〇〇〇mを超すので、冬には雪が積もる。アイゼンがあった方が安心だ。周囲は次第に山深い様相を帯びてきて楽しい。大天

井方岳に至ると、あたりはすっかり山になる。

大天井方岳を過ぎて急坂を下ると五番関。この真下をトンネルが通つていて、国道一六八号線と一六九号線をつないでいる。トンネルの西側の入口まで降りて、さらに下ると洞川温泉に出る。大峰講をつくつて山上方岳(二七一九m)に登る人々のための宿が軒を連ねる土地だ。五番関では TENT を張つて、これまで四、五泊したろうか。鞍部に当たるので、水を運ぶことが必要な場所である。

五番関には女人結界門がある。ここから山上方岳までの間には「蛇腹の頭」という鎖場があつて、氷雪期にはアイゼンがないと危険だ。ここを過ぎると洞川から山上方岳に多くの人々が登る道と合流する。五番関から山上方岳を経て阿弥陀方森(一六八〇m)に至るまでは現在もお女人禁制になっている。これに反抗して女装して堂々と登る男性、男装して秘かに登る女性がいる。一度、スカートを翻しながら登る男性を含む団体と出会つて言葉を交わしたことがあるが、口にする言葉は全く普通の山男だった。

山上方岳はTVでも時折放映される「西の覗き」という行場がある。係の男にお金を払うと、上半身に太いロー

プが掛けられる。一気に絶壁から体を突き出され、「親孝行するか」と言われ、「する、する!」と答えると放免してもらえるのである。私はやりたくないの、友人がやってみようのを眺める。係の男は鬼瓦のような顔に見えたが、何度も会っていると好人物に見える。この場所から少し南東に歩くと宿坊が並び、最も高い位置に山上権現を祀る大峰山寺がある。この辺りは何だか俗っぽい感じがするのは私だけだろうか。

大峰山寺の脇から、奥駆け道は再びぐつと静かになる。小笹の宿があつて泊まることもでき、流水も補給できる。阿弥陀方森の女人結界門を過ぎると、次に目指すのは大普賢岳(二七八〇m)である。四月末から五月にかけて、途中はシャクナゲが美しい。また、伯母谷を覗く絶壁もあつて壮観である。

大普賢岳へは柏木からの長めの道、和佐又からの短かめの道もあつて、いずれも楽しい。これまでに一〇回近く登頂しただろうか。山頂からは山上方岳を振り返り、烏帽子のような特徴の行者還岳(一五四六m)を始め、弥山(二八九五m)の大きな山塊、大峰山脈最高峰の八経方岳(一九一五m)などを一望することができる。

(つづく)

## 人権という隠れ蓑

内田幸彦

知り合いのイカレた息子が免許もないのに車を買った。その後で免許を取りに自動車学校へ行った。母親は心配して、何か免許を取らせない良い方法はないかと相談された。一計を案じ、自動車学校に掛け合った。事情を話し、この者は精神異常だから不合格にしてほしい、と。

自動車学校側は、

「合格点があれば合格にします。何でも不合格に言うなら警察の許可をもらって下さい」

と、頑として応じなかった。

警察に行っても同じように頼んだ。警察の答えも同じだった。人権蹂躪になる、と言う。

私は言った。

「本人は軽いが精神異常で、車に乗ると重大な事故に繋がるかも知れないんですよ。万一、第三者に迷惑を掛けたりどうします？ 事故のないように社会の秩序を守るのがお宅らの仕事でしょう！」

「そうです。お宅のおっしゃる通り

です。でも、私ら公務員は現行法を守るしかないんです。法律に背くことは出来ないのです。そこを何とか御理解をいただきたいのです。実は我々もこんな矛盾した世の中に憤慨しながら毎日仕事をしているのです。何とか御了解いただけないでしょうか……」

と、哀願するように言う。

「そんな馬鹿な！」

被害者のこと、加害者のことはどうなる？ 埒があきそうにないので警察を出た。

これも知人の一人息子だが、早五十歳近くにもなっているのに、アル中で親が手を焼いている。平素は借りてきた猫のように大人しくて普通だが、一旦アルコールが入ると一変、目を据え、大トラに変貌する。月給は呑んでしまい、借金は親に払わせ、夜遅くまで呑んで車で帰るから、可哀想に親は本人が帰るまで気になつて眠れない。親は今夜だけだぞと金を払ってやるから悪循環で、生活は

改まらない。

昔は勘当も出来たが、現在は無効だそうだし、酒をやめる施設も本人の意志でないと入れないというから困ったものだ。私は一度本人に頭を打たせろ、放つて置け、と言うが、それが出来ないから堂々めぐりを繰り返している。そんな家庭に限って金がある。金のあるのも善し悪しだ。あるからツイ払う。払ってしまうから悪行は続く。

人権尊重も結構だが、それはまともな常識人に必要なことだ。精神その他に異常のある者は別だと思ふ。もともと半人前の者に人権など考える必要はないと思う。法の一点張りでは矛盾が起きる。

そんな事より、被害者はどうなる？ 殺され、障害者になり、親族を奪われ、人生を狂わせられる。無関係の被害者を軽く扱い、精神異常者を第一義に考えるのはおかしい。

最近頻発する凶悪犯罪に、刑罰も徐々に厳しくなっている。戦前とは違い、兇暴化し、今までの日本にはなかった犯罪ばかりが横行している。親殺し、保険金殺人、銀行強盗、幼児虐待など、連日新聞を賑わせてい

る。これは明らかに行き過ぎた自由の結果である。

犯罪者の写真を見てみると、どこかの旦那、あるいはお坊ちゃんみたいな顔をしている。今時の人間は見た目と中味が大いに違っている。これまでの常識は通らない時代になった。

金属に例えれば、彼らは鉄か鉛なのだ。もともと質の悪い鉄や鉛は金にも銀にもなれる訳がない。鉄は鉄、鉛は鉛の処置をするべきで、味噌も糞も一緒にしては大変な事になる。

私は軍国主義者ではない。侵略戦争はいけなないと考えている。しかし、少なくとも戦前・戦中は以上のような事件は耳にしなかった。武士道に基づく軍人教育・道徳教育は人間の最低基準を叩き込んでくれた。君に忠、親に孝、兄弟仲良く、夫婦相和し、節約・勤勉・貯金など、生きる必須条件を身につけてくれた。戦争の時代にもいい所はあったと私は思っている。

## 山姥修行 ②



蒲原ユミ子

だけど、七実には人に言えない悩みがある。それは学校のぼつとん便所だった。くさいし、うす暗い便器の下の方から手がにゆうっと出てき

ような気がする。(ずっと前聞いたお化けの話なのだ。)だから、七実は学校の便所はよほどでないと使わない。体に悪いけどがまんしてしまふ。家の便所はお父さんにたのみこんでタンク式の水洗トイレにしてみましたから、なんとか大丈夫だ。

七実がかますを全部運び終わると、おばあさんは、  
「お隣さんのお近づきに、いい物をあげようかの」と言い、庭の奥へすたすた歩いて行った。七実もついて行った。

そこは崖になっていて三メートルほど下にきれいな谷川が流れている。おばあさんの家は七実や理恵の家よりかなり低い位置にあるようだ。向こう岸の崖つぶちには柿の木があり

山葡萄やアケビのつるが藪をおお

ている。

おばあさんは太いケヤキの木にからませた長い藤づるをつかんで大きく揺らしていたかと思うと、あつという間にふりこのように揺られて向こう岸の柿の木に飛びうつった。そして、みごとに熟れている柿の実をもらいでポケットに入れ、また揺らしてさつさともどつてきた。まるで、女ターザンだ。七実は口をぼかんと開けて見とれていた。

おばあさんは七実のそばに来ると、ポケットから布袋を出し、みごとに熟れた柿を入れてくれた。そしてまた、別のポケットをももぞもぞやっていて、いつの間にか採ったのかきれいな薄紫色のアケビを出し、それも袋に入れた。

「アケビの皮は天ぷらにするとびきりうまいからね。お母さんにやってもらいな」

おばあさんは袋を七実に渡すと、すたすた家の方に歩いていった。七

実もあわててついていくと、おばあさんは山道を指さしながら犬のケンタに言い聞かせている。

「嬢ちゃんに道案内してやりな。こちの道だと隣の山に近いから」

ケンタはわかったのかわからいか知らないが、じつとおばあさんを見つめている。七実が近づくと、おばあさんはふり返って言った。

「わしいそがしいからな。ケンタはかしこい犬だから心配ないよ」

ケンタはしつぽをふりながらとつとことつと歩き始める。七実は不安だけれど、ついて行くしかない。ケンタはぐんぐん山道を登っていく。七実は必死でついていく。

しばらく紅葉まっさかりの山道を歩いていくうちに、見なれた古い屋根瓦が見えてきた。七実の家だ。七実がほつと息をついた時、どんと背中をおされた。

「ギャアッ！」  
ふり返ると、そこに理恵がうらや

ましそうな顔して立っていた。

「七実ちゃん、自分だけお化け屋敷に行つてずるいよ！」

なんだ、お化け屋敷つておばあさんの家のことだったのかと思ひ、七実はぐつたりしたけれど、ちよつとほつとしたのだった。

## 2 転落

きょうは三連休のしょっぱな。

空はすかつと晴れ、ぜつこうの行楽日和だ。けれど、七実はきょうも理恵の「おばけやしきへ行こうよ！」をこつとわつて、家族総出で家から遠い山の畑でサツマイモほりだった。

やつと首のすわるようになった赤ん坊の勇太はお母さんにおんぶされてにつっこにこ。

黒い土の中から美しい赤紫色のサツマイモがよつきりと顔をのぞかせる。お父さんが、芋の大きさに合せて、

「ほれ、七実の頭が出た！」とか、「こいつは勇太のちんちん」などと喜んで笑わせている。七実はずつマイモほりが初めてなので楽しくて仕方がない。せつせつせつと芋を袋につめていく。

お母さんはハート型の葉のついた柄を折っては、

「これは栄養もあるし、せんいも豊富だからね」

と言いながら集めている。もう食べきれないほど山のようにたまっている。それでも、「もったいない、もったいない」とぶつぶつ言いながらやめない。貯金の残りが少なくなってきたので、お母さんは冬のたくわえのために食べられそうな物はなんでも集めているのだ。

昼近くになり、ようやく全部ほり起こし古いリヤカーに山と積んだ。

リヤカーは村の人から使わなくなった物をもらったのだ。もらった耕耘機もあるけれど、この山の畑は道が狭くて急な坂道もあるからリヤカーしか通れない。

リヤカーはもちろんお父さんが引っ張る。重たいリヤカーの後ろを押

すのはお母さんと七実。そして、リヤカーの後ろには三メートルほどの丈夫な縄がしつぽのようにくくりつけられている。これはとても重要なリヤカーのブレーキなのである。急な坂道ではリヤカーは荷の重みで暴走しかねない。だから、後ろでお母さんと七実が引っ張ってリヤカーがゆっくり下れるようにする。お母さんは勇太をおんぶしているから、三年生の七実の役割はとても大事だ。



山の畑は気持ちがいい。七実の家も山の中腹にあるのだけれど、ここはもつと高く見晴らしのいい台地だ。遠くの山々が美しいうす紫色に連なっている。

山の下りにさしかかった。お父さんがさげんだ。

「地獄の坂道だぞ。死ぬ気で引っばれ！」

「オッケー！」

七実はこたえて腹に力を入れた。

坂の上から見ると、こわいほどの急傾斜に見える。しかも、片側は崖でほとんど木も生えていない。リヤカーが落ちたら、お父さんの命は保障されない。七実の前にお母さんは腰をぐっと落としかまえた。背中の勇太は亀の子のように張りついている。七実も地面にくっつくくらい腰を低めて両腕に思いっきり力をこめて縄を引っばった。

ズリズリズリ・・・

リヤカーはゆっくり下りていく。ふんばっているお父さんは見えないが、七実のすぐ前のお母さんは体を後ろに倒し思いっきり縄を引っばっている。背中の勇太の顔も真っ赤だ。

ズリズリズリズリ・・・

十五メートルほど下った。あともう少しで最大の難所が終わる。カーブにさしかかった。

とつぜん、七実の鼻先でブツ！と

勇太のお尻が鳴った。七実はずっとけた。そして、ちよつと力が抜けて

しまった。とたん、ズズズズ・・・と七実の足がすべり、お母さんに衝突した。お母さんもすてんと足をすべらせた。

リヤカーはズズズズと加速して勢いがついてしまった。

「ギヤアツ！」

リヤカーはカーブを曲がりきれず、崖に飛び出した。お父さんはリヤカーの柄につかまったまま宙ぶらりんになった。お母さんと七実は死に物狂いで縄を引っばりなおした。

けれど、もう落ちかけたリヤカーはズリズリズリと落ちていく。

崖の途中に、木がはいつくばるようにして枝を伸ばしていた。リヤカーはあやうくそこへ引っかかった。七実とお母さんは崖つぶちでやつとどどまった。七実はそつと崖を見下ろした。

リヤカーが引っかかっている木はたよりないほど細く、今にもリヤカーの重みで崖下に落下してしまいうである。七実は頭が真空になってしまった。

中谷笛子が混沌市にDV（ドメスティック・バイオレンス）シエルター「みみずくの家」を作ったのは四年前のことだった。当初は公的補助もなく、友人五人と資金を出し合い、小さなアパートを借りることから始めた。弁護士の人や女性市議の助けを受けてなんとか軌道に乗り始め、去年DV法が改定されて自治体の支援義務が出来たため、市からの補助金も出るようになった。

しかし問題はそれからだ。今まで我慢していた女たちが、法の改定をきっかけに凶暴な夫や恋人から逃れる道を探し始めた。「みみずくの家」の電話は鳴りっぱなしになり、福祉事務所からの連絡も増えてきた。そうなれば今度は人手が足りなくなってくる。シエルターを増やすには限界があり、サポート体制は追いつかない。しかも行政の口出しは増えた。笛子は頭が痛かった。

その日も中谷笛子は尾行を気にしながらシエルターの一つ、菜の花町三丁目の二階建てモルタルアパート

にやってきた。すると二階のその部屋の前に怪しい男の影が見えた。その男は大きな声でなにか怒鳴っていたが、やがて部屋のドアをドンドンと叩き始めた。笛子は急いで携帯電話を取り出し、警察と事務所に連絡した。それから階段を駆け上がった。ドアを破られる前に男を引きとめ、時間を稼がなければならぬ。

「ちよつと、あなた何してんの！」  
鋭い声が振り返る。

「もう警察呼んだからね、すぐ来よう、ここには誰も住んでいないんだから、早く帰んなさい」

言われて男はオドオドした様子になった。まだ三〇くらいの痩せた大男だ。

「女房がここにいるんだ、連れて帰る」

おびえながらも男は強情だった。

「誰もいやしないんだって、中から声がした？……しないでしょ？……」

こんなところで昼間から騒いでたら、近所迷惑だよ」

「おばさん……あんた誰だ？」

男の矛先が自分に向いたところで笛子は深呼吸した。

「誰だっていいでしょ、あんたこそ何者よ、ここは静かな住宅街なんだから早くどっか行ってよ」

負けずに怒鳴ったところでサイレンを鳴らしながらパトカーがやって来た。ドアが開き、数人の警官が階段を駆け上がって来た。笛子はホッとし、男は身構えた。

「通報があったので事情を聴取します、署へ同行願います」

警官は有無を言わせぬ口調で男に言った。

「なんだおまえら、これはオレと女房の話なんだよ、カンケーねえだろう、民事不介入じゃねえのかよ！」

男は抵抗の姿勢を見せた。しかし警官は容赦しなかった。男の両脇を二人で押さえ、抱えるようにしてパトカーへ運んだ。

「ふざけんな、バカヤロー！」

男の遠吠えを聞きながら笛子は胸をなでおろした。しかし安心してばかりもいられない。誰かに知られた

以上、このシエルターはもう使えない。敷金礼金を払って借りたばかりの部屋なのにまた別の部屋を探さなければならぬ。中谷笛子はまた頭痛がした。

「あの女（ひと）、いくら禁止してもダメなのよ、すぐ誰かに電話しちゃうのよねえ」

スタッフの一人、オリブこと織部弥生が言った。

「携帯も取り上げたんだけど、どこからまた持ってくるし。一人でいるってことが耐えられないのね」

菜の花町のシエルターにかくまわれていたDV被害者女性のことだった。

シエルターに入った者は原則として外部への連絡を絶たねばならない。親兄弟にでも連絡は禁止だ。それは本人だけでなく、シエルター機構そのものを守るためだ。しかし禁止を守れない人間は多い。この情報化社会で情報発信を禁止するのは、呼吸をするなというに等しいことかもしれない。

れない。「みみずくの家」でもそれは悩みの種だ。

「今度、紹介されてきた母子（おやこ）もなんだかおかしいのよ」

オリーブは続けた。

「母親のほうはまだまともなんだけど、娘は落ち着かないの。すぐ逃げ出すんだって。そしてまた捕まる。

結局、あの娘はブーマランみたいに元に戻っちゃうらしいの」

その母子は都内の福祉事務所から紹介されて来たDV被害者で、義理の父親が暴力団員だった。二人は暴力を受けていただけでなく売春を強要されていた。警察が保護したものの、始末に困って管轄外の渾沌市へ回されて来たのだ。一般市民でも問題は多いが、組織暴力団となると難問は桁違いだ。

「もう一つ気をつけてほしいことがあるの。DV法は家族を壊す悪法だつて主張しているグループがいるでしょ？……彼らがうちを狙ってるらしいのよ。今まで以上に慎重にね」

「わかった」

オリーブの警告に笛子は頷いた。

「とにかく新しいシェルターを用意しないとバンクよ。あの母子はひとまずうちに連れて行く。明後日まで

に準備よろしくね」

中谷笛子はオリーブに手はずを頼み、次室の母子を呼んだ。母親は四〇代、娘は二〇そこそこ、二人とも細身で色白で美しい。しかし目を見るとどこか虚ろだった。笛子は二人を促し事務所を出、タクシーを停めて二人を自宅へ運んだ。

笛子の自宅は足賀沼のほとり、渾沌市甚平新田にある。子ども二人は自立し、夫は定年退職のあと高齢者事業団で介護用具設置をやっている。DV被害者を自宅に連れ込むのは例外的だが、この際は仕方がなかった。笛子は母子に簡単な夕食を勧め、娘の部屋に寝かせた。

（とにかく明後日までおとなしくしてほしい……）

笛子はアスピリンを飲みながらそう祈った。

翌朝、笛子の祈りも空しく娘がいなくなっていた。夜の間台所の窓から逃げ出したらしい。

「どこへ行ったの？心当たりはないの？」

母親に聞いてみても「さあ……」と首を振るだけだった。笛子はさっそく警察とスタッフに捜索依頼をし

た。そして自分でも渾沌駅周辺や盛り場を探してみたが、どこにも見つからなかった。

娘が発見されたのは次の夜で、新宿歌舞伎町で客を引いているところを警察に補導されたのだった。彼女の身柄は渾沌警察に送られ、翌朝笛子はスタッフの車を借りて引き取りに行った。娘を連れて警察の玄関を出てくると、隠れていた数人の記者がフラッシュを炊いた。

「写真はダメよ！……DV被害者の取材は許可されていません、やめなさい！」

笛子は叫んだが、その声の上にかぶさるようにハンドマイクの叫び声が聞こえた。

「DV法の被害者、家庭を破壊された男性の声を聞きなさい！」

「そうだ、DV法は日本の伝統を破壊し、家庭を崩壊させる悪法だ！」

ハンドマイクを握っているのは「くまりん」を名乗る熊田峰子。家長制維持を主張する右翼グループの中でもさらにタチの悪いDV法攻撃女だ。そしてその横には、菜の花町シェルターで警察に連行されたDV夫がいた。男は笛子を血走った目で睨み付けていた。

（こんなところでこんな騒ぎを起こされたらたまらない、DV支援もシェルターもボロボロだ、そんなことも分からないの？）

笛子は娘の頭に乗分の上着をかけた。そして彼女をかばいながら車の方に走ったが、それより速く数人の男たちが笛子の前に立ちふさがった。彼らは明らかに一般市民とは違う人相風体だった。男たちは上着ごと娘をひたたくり、黒塗りのベンツに押し込めた。笛子は悲鳴を上げた。その声を聞きつけて数人の警官が警察から出てきたがもう遅く、ベンツは国道を北へ走り去った。「くまりん」はなおも笛子に向けて悪態をつき続けていた。

「あんたたち、自分がなにをやったのか、わかかってないでしょ！」

笛子は声を出してそう言ってみたが、「くまりん」には届かなかった。笛子はまた捜索願いを出すために、再び足取り重く渾沌警察の中へ戻った。

娘の絞殺死体が東京湾に浮かんだのは翌朝のことだった。笛子は朝のテレビニュースと新聞でこの記事を読んだ。この朝だけは中谷笛子も自分の仕事を呪った。

## 街中の似顔絵師(十四)

瀧本 文彦

僕がキャバレーやクラブやレストランやバーなどを転々としてピアノを弾いていた頃、まれに茶系統の色のピアノに出くわした。渋谷の道玄坂のイタリアンレストラン「タンポポ」のグランドピアノは白い色だった。白い色のピアノを弾いたのは「タンポポ」のピアノだけだった。僕の弾いたピアノはほとんど黒い色だった。

「音楽の友」別冊号に、ベートーヴェンの使用したフレームが鼈甲色の丸い眼鏡や、補聴器のカラー写真が載っている。でかい補聴器を見ていると痛々しくなる。その形はどう形容したらいいか。プリーキで出来た柄杓のような漏斗のような形をした補聴器を、片方の耳に付けて聞くようにできている。現代の補聴器から見ると、補聴器とは思えぬ大きな異様な形をしている。

ベートーヴェンの自筆の楽譜も、各曲1ページの四分の一の縮小版の写真が載っている。ベートーヴェンの自筆楽譜は、なぐり書きのような悪筆の読みにくい音符で有名である。しかしピアノソナタ第32番の自筆楽譜の筆跡は柔軟なタッチで書かれていて美しいと思った。五線の右端に音符を書ききれなくて五線を自筆で継ぎ足している。右上に跳ね上がった

た五線を書いている。五線紙の最下段の空白欄に文章が書かれている。右端に継ぎ足した跳ね上がった五線の下にも、なにやらもじもじや文章を書いている。何と書いているのであろうか。

交響曲第五番「運命」第一楽章の出足の1ページが載っている。四分の一の縮小版だが、「運命が扉をたたく音」とベートーヴェンが言った音符が見て取れる。ヴァイオリン・ソナタ第五番へ長調「春」の譜面の筆跡は踊っているように、また流れるように書いている。待ちわびた春を思わせるのではないか。ピアノ・ソナタ第14番嬰ハ短調「月光」の一楽章は音の構成が簡素で、筆跡が角ばって、隙間が多い音たちは初心者のピアノ練習曲のように見える。交響曲第3番「英雄」の表紙。「この楽譜の全草稿は消失して存在せず。表紙と写譜が残っている」と書かれている。表紙の欄外に「『ボナパルトに題す』804(1804)8月」と注意書きがベートーヴェンにより書かれているが、その文字はペンで激しく抹消され、ナポレオンの皇帝即位に対する怒りが現れている。

ベートーヴェンのラブレターも載っている。「ベートーヴェンの死後、かれの机の抽出しから色々な書類、テレゼ・ブルンスウィック伯爵嬢の肖像画などと一緒、5枚の紙の裏表いっばいに、鉛筆で書かれた恋文が現れた。それは三度にわけてかかれたもので、宛名がなく、それがだれであるか今だになぞとされてい

る。この手紙は《わが天使、わがすべて、わたしの……》ではじまり熱烈な恋慕の情をのべ、途中《わが不滅の恋人よ》と呼びかけの言葉がある」と書かれている。ベートーヴェンは毎年恋をしたらしい。令嬢にピアノ教えるがその令嬢に惚れてしまうのである。そして振られるのである。また翌年新しい令嬢がピアノを習いに来る。また恋をして振られる。それでも懲りず次の年、恋をするのである。人の心を揺さぶる名曲を作るには恋をしなくてはならないのだろうか。老いらくの恋でも名曲が出来るのであろうか。……

この別冊号の2年程前に買った「音楽の友」という月刊誌の広告で某音楽専門学校を知った。文部省指定音楽教員養成機関と書かれていた。卒業すれば中学の音楽教員免許をとる資格がいただけなのである。中学校の音楽の先生になれたとしても、大勢の生徒に音楽を歌わせなければならぬ。合唱曲を指導しなければならぬ。自ら歌って聞かせなければならぬ。大勢の生徒の前で大きく口を開け、大声で歌ってみせる自分を想像すると、俺には向いていない職業だ、とてもできぬことだと思ひ、ピアノ調律科に入った。しかし1年もたたぬうちに、ピアノ調律科の先生がボケはじめたのである。65歳位の色黒の鼻の天辺が少しひしゃげたところに特徴のある先生だった。生真面目な職人気質を感じた。ベートーヴェン

風に手を後ろに組み、なにか考えているように歩いている姿が目につく。僕と親しく付き合っていた女生徒の家にその先生がピアノの調律に来た。午前10時ごろ調律を始めた。終わったのは午後6時頃だったと彼女は言った。普通一般の家庭のピアノを調律する時間は長くて2時間位である。8時間もかかったとは。壊れたピアノだったのだろうか。

僕は彼女の家に何度か遊びに行ったが、普通のアップライトピアノが置いてあった。そのピアノを何度か弾かせていただいた。普通に鳴っていた。

「あの調律の先生、おかしんじゃない。朝来て夕方までかかるなんて」と彼女は言った。

「あのね瀧本君、ピアノの弦を緩めたり締めたりしながら何度も首をかき上げるのよ。うーんと言って腕組みして考え込んでいるのよね。あまりに完璧主義のため、理想の音に近づけず悩んで夕方までかかったのかしら。コンサートホールでスタインウェイのピアノでもないのにねえ」

「そうだねえ。ホロウィッツやベネデッティ・ミケランジェリの弾くコンサートグランドピアノなら、演奏会の前の日にそれくらいの時間をかけて調律するかもしれないけど、普通の家庭のアップライトピアノの調律なら長くかかっても二時間位で終わるでしょう。異常だねえ。弦がかなり錆びていたり、あちこちのハンマーアクションがガタガタになっ

ていたり、ハンマーのトップ・フェルトやアンダーフェルトがボロボロになつていたのかなあ。鼠がかじらないかぎりそんなことにならないなあ。このあいだピアノを弾かせていただいたけど普通に鳴っていたよなあ」

その後、調律の先生にお会いするたびにピンボケ調律先生に見えて、調律科から教員養成の本科に移った。

本科に移って3ヶ月程経った頃、梅雨になると畳からキノコが顔を出すような

## 沖縄の思い出 ⑦

多村喜木子

その頃のさきはら荘は、与那国島では珍しくナイチャーの二人が経営する宿だった。ナイチャーとは沖縄の人からみた内地(本土)の人という意味で、多少はよそ者という意味あいが含まれていたのかもしれないが、ほとんどの人は関西人や関東人のように出身地を表す言葉として使っていたように思う。

与那国島は小さい島なので不動産屋も賃貸物件もアパートもなく、住み込みの仕事以外で部屋を借りるのは容易なことではなかった。また、ナイチャーは期間限定で滞在する人が多いため信用されにくく、好んで部屋を貸す人もいなかった。ましてやナイチャーが民宿などしようものなら土地や建物を探すだけでもひと苦労だ。そのため、普通なら何もないとこ

学校のオンボロ寮の四畳半に満たない部屋へクラブのバンドマスターが尋ねてきた。ピアノを弾いている女性が体調が悪くなり入院した。五人のメンバーで店と契約しているが、今四人で演奏している。店長に契約違反だと言われた。ピアノの弾き手を捜している。弾けなくてもいいからピアノの前に座ってくれないですか。弾かなくてもギヤラを出しますからという美味しいアルバイトが現れた。僕はその話に即OKした。(つづく)

ろから民宿を始めるなど困難を極める話なのだが、さきはら荘の二人の場合は少し違っていた。アルバイトを申し込んだ時に電話で少し聞いていたが、数年前までは母屋に住むおじいとおばあがアルバイトの手を借りて経営していたが、孫が遊びに来る前の晩、おじい島のご馳走であるヤシガニを東崎(あがりざき)に取りに行つたきり帰らぬ人となつてしまいい、おばあも精神的に落ち込んで仕事が出来なくなつてしまつたのだという。そこで、住み込みのアルバイトをしていた淳子さんと、偶然に料理関係の仕事をしていた長期滞在客の豊田さんという男性に話を持ちかけてみたところ引き受けてくれたのだとか。

淳子さんは埼玉県出身で、数年前に民

宿のアルバイト募集で来たものの宿の sna ックで働かされ、同じように騙されたナイチャーの女の子たちと支えあつて契約期間を過ぎた後、やっと本当の民宿のアルバイトとなった。ちなみに与那国島には高校がなく、中学校を卒業すると他島の高校へ行き、そのまま大学や専門学校へ進んで就職するため、農業や畜産業など家の仕事を継ぐために帰ってくる男の子はいても、女の子の数が圧倒的に少なく、このsna ックはガールフレンドやお嫁さん探しに格好の場として繁盛していた。また、色が白くお洒落なナイチャーの女の子は島の男から人気があつた。淳子さんには申し訳ないが、この時に淳子さんが培つた人間関係や誰と誰が親戚で奥さんが農協で働いていて娘さんは空港で受付を……などの小さな情報

が、働く人も泊まる人もナイチャーばかりというさきはら荘の限られた人間関係から、島人との付き合いへと関心を広げていく大きなきつかけとなつた。

豊田さんは愛知県出身で三十三歳くらい。大きなお腹をユサユサと揺らして歩くサンタクロースのような体形をしていて、まん丸な顔と口ヒゲが漫画のキャラクタールのような人だった。料理はかなりの腕前だと自慢していたが、得意料理というボルシチをいつまでも作る気配はなく、煮豚がメインの時は客から苦情が出るぐらい少しの量しか出来上がらず、常に言い訳ばかりの性格と滲み出る胡散臭さから、決して悪い人ではないけれど

経歴も料理の腕も相当疑わしかった。また、淳子さんと反対側の客室で生活しており、ドアの隙間からちらりと見えた部屋の中は、アイドルの水着写真が掲載された雑誌やお菓子や煙草がゴミのように散乱していて、私生活もだらしないようだった。

そんな二人は年齢も近いことから、つきり恋人同士なのかと思いきや、直接聞いてみると互いにとんでもない! という反応で、恋愛感情一切なしの単なる仕事仲間だった。あと、親しくしている仲間では、さきはら荘を提携旅館としているダイビングショップの谷口夫婦とスタッフの五十嵐君、数年前のさきはら荘の客で、電気製品修理の技術を持っていたことから島に住みついた井上さん

いた。

豊田さんと谷口さんは同世代で友達のような関係、カラオケでは「学生街の喫茶店」や「いちご白書をもう一度」など私の知らない歌で盛り上がっていた。谷口さんの奥さんは子供がいることから客の送迎以外は顔を出すことが少なかったが、小さい体でハードなダイビングショップの仕事でテキパキとこなす元気で明るい人だった。五十嵐君は東京のテレビ局でADをしていたという面白い経歴の持ち主で、インド綿をスカートのように腰に巻きつけたりバンダナを頭に巻いていたりとか個性的な二十三歳。井上さんは最年長三十八歳の男性で、島の人

く購入してきた電化製品の修理を島で唯一の電気屋さんに頼みにくいと困っていたところ、救世主のように現れた修理屋さん。おぼあの間で口コミで人氣が広まり重宝されていた。

みんなは特に約束をしたわけでもないのに週に二回は宿の夕食が終わった頃に集まりだし、観光や野鳥や蝶の観察以外の九十%を占めていたダイビング客のもてなし(リピーターへとつながる)もかねて泡盛を飲みながら夜遅くまで宴会をしていた。さきはら荘に着いた日にはいつもの宴会が私の歓迎会となり、食堂のテーブルを縦に並び、豊田さんの料理の隣に私が作ったクリームコロッケとタマネギのみじん切りドレッシングをかけたトマトの輪切りサラダを並び、子供と一緒にやって来た谷口さんの奥さんが、宴会恒例というネギソースのかかった唐揚げを並び、オリオンビールで乾杯をした。みんなの自己紹介から始まり、最初の方は内輪的な盛り上がりで少し馴染めなかったが、いつの間にか打ち解けて、京都や学校のことなど質問攻めに合せて嬉しかった。そして次第に、与那国島の様子が想像と違ってガツカリしたことや、西表島とは全く違う環境に戸惑ったことを忘れて、「せつかく来たからには思いっきり楽しんで帰ろう」という気持ちになっていた。

## わたしの大学生活 (8)

ふじみちよ

所属している合唱団の最大イベントである定期演奏会が、昨年末に終わった。秋のコンクール以降、その日のために練習を重ねてきた。決して楽しいだけの日々ではなかったかもしれない。楽しみであるはずの音楽も、ハードな練習が続けば徐々に負担になってくる。最も苦しかったのは11月末頃。学校の課題やテストに対する不安と、本番が近づくことへの焦りに、頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。

それでも、まあなんとか終わることができたのは、何より支えてくれた仲間がいたからだと思う。毎日、休日も温かく家から送り出してくれた母や、団の先輩、同回の友達。ひとりでは決して迎えられなかった本番当日、開演のブザーが鳴った瞬間に、わたしの口からは自然と「ありがとう」の言葉がこぼれていた。わたしを支えてきてくれた、全ての人たちに対する感謝の言葉だった。

本番の演奏は、大成功だった。全体を見ればそうだったと思う。ただ自分ひとりについて言ってみれば、全くの大成功ではなかった。極度の緊張、例えて言えば心臓以外の何かが口から飛

び出そうなのキドキが、歌い始めてもなかなか治まらず、前半は散々なものだった。胸が苦しくて息が続かない！本当に悔しかった。技術向上に加えて、度胸をつけることもわたしには必要みたいだ。救いだっただのは、来てくれた大切な人たちのことを思っただげさかもしれないが「愛」を込めて歌えたこと。本番を終えてあの日を振り返る今、わたしの心には「音楽が自分だけのものではなくった瞬間、それは音楽として、ある意味で成功だ」という思いがある。素人丸出しな言葉だけれど、演奏の出来の悪さの言い訳ではなく、わたしの正直な思いだ。

話のネタとしてひとつ記しておく、演奏会ではミュージカル風の劇も行っただ。そこでわたしは先輩から大役をいただいた。ピユリスという女の子の役なのだが、この小娘は結構な意地悪で、可愛がっていた鳥が逃げたから一緒に探して泣きついてくる女の子を、「デートの邪魔しないでくれる!」と一蹴したりするのだ。その女の子とは、ひとりの優柔不断な男の子を巡って三角関係を繰り広げる。ピユリス……、なんてアグレッシブなんだ！わたしを

知らずに劇を見た人は絶対敵意を抱いたはず。しかし意外にも(？)自分の本当の性格に通じるものがあつたのだろうか、本番は快感だった。それまでの演奏での緊張感は一切なかったのだらう。後半の演奏はやけに落ち着いていた。

本番後に会った友達や、ピユリスについていろいろと感想を語ってくれたが、おもしろいことにそれらは、男の子は「ヤキモチ焼いてかわいかった」、女の子は「怖かった」という風に二分された。最初はピユリスを演じることに乗り気ではなかったけど、今は味のあるこの役をくださった先輩に心から感謝している。

定期演奏会が終わり、気がつけば主要団員は1・2回生のみに。メンバーは約半減。たくさんの先輩に囲まれて歌えていた毎日が恋しいが、新体制の中で早く自分の声の存在感のあるものにしていかねば！現在アルトメンバーはたったの3人。合唱は団体競技だが、ひとりでもちゃんと歌えていなければ合唱にはならないのだ。甘えグセから脱出して、先輩方のような立派な合唱人になろう！もうすぐわたしも先輩になる……。

